

# Ⅲ 第1分科会の概要

## テーマ：学びの場を核にした地域の絆づくり

開催日 平成23年11月5日(土)～6日(日)

会場 文部科学省

### 趣旨・概要

震災から、地域の人々がどのように復旧・復興に取り組んできたのか。人々の絆を支えたものは何だったのか。避難所として活用された社会教育施設等とその関係者はどのような役割を担ったのか。更に、全国的な課題でもある人と人とのつながりの回復や地域課題の解決等に向けて、社会教育施設等に何が期待され、今後どのような取組を推進していくべきかなどについて研究協議しました。

### 分科会内容

平成23年11月5日(土)

#### (1) 基調講演

演題：「学びの場を核にした地域の絆づくり」

講師：高橋孝助 氏(宮城教育大学長)

(主な内容)

- 今回の震災により顕在化してきた教育の格差・学力の格差あるいは従来からあった格差を含め、震災を理由として放置せず、教育復興の立場で支援していかなければならない。基礎的な力を子どもにつけることが、震災における教育復興の基本的な立場である。
- 学校を支えるには、地域社会がしっかりしていかなければならない。いわゆる昔の地域は地域、学校は学校という意識ではなく、震災を契機として新たな住民意識をもった住民が学校を支え、行政や地域と学校が協働していくという形にならないと、あまり良くはならないだろう。
- 学校で子どもたちがどういう笑顔で、どういうふう to 成長していくかということをひとつの基礎にして考えるべきだ。震災前に戻れば良いということではなく、震災前に抱えていた問題と、震災で気づかされたことを共に、修正していく様なことを考えるべきではないか。



基調講演の様子



## (2) 事例発表

### ■ 齋藤 文良 氏 (宮城県気仙沼市立松岩公民館館長)

#### (主な内容)

- 松岩公民館の避難所運営は、円滑、有効に機能したというお褒めをいただいた。これは公民館の日頃の活動が地域の方々と、とりわけ自治会長連絡協議会の方々と連携し、まちづくりの観点から取り組んできたということである。
- 地域の方々との自立的な活動の過程で人の交わりが深まって今回の震災に、その力が発揮されたと考えている。
- 「公民館は地域の拠り所として、いろんな生活情報の発生源であって欲しい」という避難者の思いをこれからの活動に役立てていきたい。



### ■ 笠原 裕二 氏

#### (福島県教育庁参事兼室長第35回全国高等学校総合文化祭福島県実行委員会事務局長)

#### (主な内容)

- 避難所への高校文化部の訪問活動の目的は、①避難している地域住民に、元氣を取り戻してもらうこと。②文化部活動がひとつの地域貢献であることを認識してもらうこと。③高校生にとって、今後の人生における、なんらかの社会貢献活動に参加するということへのモチベーションを高める経験になることである。
- 高校と地域が連携していくための課題は、①高校側に、地域との連携を構築していくという意識が弱い。②高校と地域をコーディネートする体制がない。③高校が地域に出て活動するためのコスト。これを支援するような仕組みがないことである。



### ■ 本田 修一 氏 (鹿児島県志布志市長)

#### (主な内容)

- 生涯学習には、人生冒険という意味合いもある。その場でいかに多くの生涯学習体験を、楽しく学びながら、そして学んだことをまちづくりに生かしていくということではないか。
- 薩摩いろは歌に「いにしへの道を聞きても唱へても我が行にせずば甲斐なし」(古の道を聞いて唱えても、我が行いにしなければ、甲斐が無い)という言葉がある。生涯学習・街づくりについてもこのことをモットーとして、必ず行動に移す学びを目指している。



### ■ 竹原 和泉 氏 (横浜市立東山田中学校コミュニティハウス館長)

#### (主な内容)

- 学校と地域をつなぐコーディネートをしているが、地域情報は人が運び発信している。日頃から良い関係づくりをし、丁寧なコミュニケーション、雑談の中からいろんな情報が入り、地域に発信されていく。
- 地域と学校を結ぶために、「情報を共有すること」、「思いを共有すること」、「アクションを共有すること」が大切だと私たちは考えている。情報共有のための一つの実践として、中学校区4つの学校と地域の情報が掲載されている「コミュニティカレンダー」を全国に先駆けてつくっている。
- 地域課題はたくさんあるが、強いリーダーだけが引っ張るのではなく、みんながそれぞれ担い手として活動し、人と人がつながり、支え合える様な地域になっていければと思っている。



### (3) ナイトセッション

#### 「福島からの発信、そして対話」

～時計を1分遅らせて考えたこと～

#### 福島県在住の詩人和合亮一氏と福島県社会教育主事天野和彦氏による対談

(司会：勝方信一氏（ジャーナリスト）)

##### ■二人のやりとり（一部）

- 避難所生活では、ぎりぎりの状態でも他の人のことを心配する人がいて、そこから少しずつ皆が人間らしくいられる環境を作ろうという動きが出てきた。
- 避難所では、町や地域の世話役の人たちを中心にしながら、自分たちの生活をなんとかやっていこうという人たちが非常に多かった。
- 今の出口の見えない福島は、「悲しい」以上の表現のしようがないが、お互いにぬくもりを交わし合う中で、悲しさと向き合って次の明かりを探すということが、日本人の感性・気質としてあるのではないか。



ナイトセッションの様子



詩を朗読する和合亮一氏

### サイドイベント

#### ● 雄勝復興輪太鼓の実演

東京駅丸の内北口地下「動輪の広場」にて、宮城県石巻市立雄勝中学校の生徒たちによる復興輪太鼓の演奏が披露されました。（東京駅開業以来、丸の内駅舎の屋根に雄勝硯石が使用されていることから、今回の演奏が実現しました。約500名の聴衆の中には、雄勝出身者も多数集まっていました。）



東京駅での演奏の様子



平成23年11月6日（日）

## (1) 子ども熟議（ワークショップ）

～子どもたちがつむぎ合う、これからの「絆」～  
岩手・宮城と東京をネットで結んだ子どもたちによる熟議

### （参加児童生徒）

- ・岩手会場・・・山田町・大槌町の小中学生
- ・宮城会場・・・石巻市の小中学生
- ・東京会場・・・三鷹市・杉並区・横浜市の小中学生

### （ファシリテーター）

- ・岩手大学、宮城教育大学、東京学芸大学の学生

### （全体司会）

生重幸恵氏（NPO 法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長）

### ■参加児童生徒からの意見（一部）

- 一番うれしかった支援は、支援物資の段ボールに書いてあった励ましの言葉だった。
- 震災を通じて、改めて感謝という言葉の意味がわかった。
- ありがとうと言ってくれる地域の人言葉が、すごく自分にとって意味のあるものだとなった。
- 誰かの役に立ちながら生きていくことは、すごく大切なんだとわかった。
- 家族って大切だ。心の支えになる。とても大切な存在だと始めてちゃんと理解した。
- 今回の震災で、積極的に地域の行事に取組もうと思った。また、進んで挨拶をしようと思った。



熟議の様子



発表の様子



### ■生重氏の感想

- 「心のつながりが大切だ」、「これから必要なつながりは？」という質問に対する子どもの答えが印象的だった。また、最後の発表で印象に残ったのは「絶対に忘れてはいけない」。大人はこの言葉を真摯に受け止めなければならない。日本人は目先に見えることはやるが、8ヶ月経ったらどこかで見ない、聞かない、言わないとなってしまうところがある。「忘れない」という子どもたちの言葉を真摯に受け止めて、私たち大人がまず見本を見せて何が出来るかということを発信し続け、行動し続けなければいけないということを子どもたちから教わった。





子どもたちの意見

## (2) シンポジウム

### 「これからの地域の絆づくりに向けて今、私たちに求められること」

- 「学び」と「絆づくり」をキーワードに、それぞれの立場で実践されていることを紹介し、震災後に見えてきた新たな課題や今後の方向性、地域づくりの可能性について議論しました。

#### ■コーディネーター

明石 要一氏（千葉大学教授）



#### ■シンポジスト

生重 幸恵氏（NPO法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長）

（主な内容）

- 21世紀型の教育は、学校の先生たちだけが全てを背負い込むのではなく、地域社会も、企業社会も含めて、全ての大人が、どのような繋がり、どのような発信をしていくかが重要。そして学校における先生が頑張る姿を応援する。私たちは、先生あつての学校だということを忘れず、一定のルールの中で、一緒にやっていけることを探す活動をしている。
- 子どもたちは感動して、出会って、触れ合って、興味を持って、知りたいと思って深めていく。人と関わるということ、キャリア教育のキーワードはこれにつける。私たち大人ができる時にできることをやるという、それが地域を作っていく大事なキーワードになる。



関 福生氏（愛媛県新居浜市教育委員会社会教育課長）

（主な内容）

- 地域主導型公民館で目指しているのは、社会的な要請を解決していくための新しい組織をつくり、それを住民の有志が集まって、みんなで熟議し、事業を企画し、実践していく仕組みをつくることである。
- 私達の求める成果は住民の意識変革である。自分の目の前にあるゴミひとつを拾い、花ひとつを植える、そういったひとつひとつの積み重ねを地域としていつも重ねていけるような、そういう風土にしていくのが本当の絆なのではないか。





長谷部 治 氏 (神戸市社会福祉協議会／福島県災害ボランティアセンター運営支援者)

(主な内容)

- ボランティアバスというのは、従来、水害向きで地震向きではないといわれている。みんなが等しく同じルールで同じ活動をするというのが水害で、地震は活動する内容がみんなバラバラ。バスで行ったら、帰りの集合時間にみんな揃わない。行ったはいいけど帰れないということがよく起こる。
- 実は仮設住宅は仮の住まいという気がするが、みなし仮設の場合などそこが終の住まいになる方や、そもそも仮設住宅入居期間があまりにも長い。そこで関係性をきちんと作っていくことをやらないといけないし、住民本人や周辺の人との上手いつなぎ役が必要になってくる。



岸川 政之 氏 (三重県多気町まちの宝創造特命監)

(主な内容)

- まちづくりの仕掛け方は、「無いものは探さない」というやり方をしている。無いものを探してしまうと、コストもかかるリスクも伴ってくる。歴史が無いと、根づかせるのも大変。それよりも、掘り起こしていく作業の方が本当に親近感がわいて良い感じになる。二番目には、自分たちで考えるということをやっている。
- 人の良い所を見つけて感動できる、そういう地域づくりが良いかなと思う。例えば、「イチロー選手が、3割打つのは凄いですね」という人間関係。「あなた6割も打っていないじゃないですか」ということでなく。良いところを見つけて伸ばしてあげて、可能であれば、活躍できる場面を提供できたらもっと良い。いろんな人を認めて、感動できたら良いのではないかな。



萩原 亜弥香 氏 (岩手大学公認ボランティア団体「天気輪の柱」代表)

(主な内容)

- 個人とか団体の力だけでは復興に対する力は足りないなので、国の大きい統括的な力が必要。被災者は国に対して、多くのことを期待できない状態におかれている。人の信頼、ネットワークがなければ意味はないし、まちづくりは、信頼のネットワークがあって初めて構築される。
- 私はひとつひとつの出会いを大切にしている。何かしてもらった時には感謝の気持ちを伝えたり、何かお願いする時にもちゃんとその人の所へお願いしに行ったり。次もあるとは思わないで、そのひとつひとつのことをしっかり大切にしていけるようにしている。それがどんどん広がって、つながっていくのではないかな。



## サイドイベント

### ● 模擬授業「地球温暖化と新エネルギー」

企業による学校現場での教育支援活動の実践事例紹介として、NPO法人気象キャスターネットワークとシャープ株式会社が協働して全国の小学校で行っている「小学校環境教育」の模擬授業へ小学生を招待しました。終了後、子どもたちは、“エコ生活宣言”をしました。



気象キャスターによる授業



エネルギー実験の様子



子どもたちからの“エコ生活宣言”を背景に記念撮影



### (3) 交流広場（11月5日（土）～6日（日））

参加者同士が自由に交流を深め、新たな「絆」づくりができるよう、地域連携や震災復興の支援に取り組んでいる学校や団体の活動報告、東北の人たちへ想いをこめて描いた絵画等のパネル展示、「雄勝復興輪太鼓」や「Kizuna 311」等の映像の紹介、活動の一環として被災地支援も行っている慶応義塾大学アカペラシンガーズK.O.Eによるライブなどを開催しました。



参加者による交流



慶応義塾大学アカペラシンガーズK.O.Eによるライブ

|    | 出展団体                          | テーマ                                |
|----|-------------------------------|------------------------------------|
| 1  | やまたろう本部<br>(東山田中学校学区学校支援地域本部) | やまたろう岩手応援プロジェクト<br>～横浜の山田から岩手の山田へ～ |
| 2  | 「顔の見える支援」実行委員会                | 顔の見える支援<br>～他人事だからこそ、私たちは決して忘れない～  |
| 3  | 三重県多気町                        | 高校生、学校、企業、役場などが連携「まごの店」            |
| 4  | 光村図書出版株式会社                    | かざぐるま通信                            |
| 5  | 福島県いわき市立小名浜第一中学校              | 復興への願いをこめた大漁旗                      |
| 6  | 鹿児島県志布志市(志布志創年市民大学)           | 志布志創年市民大学の取り組み                     |
| 7  | 「ビッグパレットふくしま避難所」<br>刊行委員会     | 生きている 生きていく                        |
| 8  | 岩手大学<br>(公認ボランティア団体「天気輪の柱」)   | 震災ボランティア活動                         |
| 9  | 尚絅学院大学(宮城県仙台市)                | 名取市での地域連携とボランティア活動                 |
| 10 | Kizuna 311                    | 助けあい、乗り越える。私たちの財産は [kizuna]        |
| 11 | ふくしま総文<br>(第35回全国高等学校総合文化祭)   | ふくしまからのメッセージ                       |
| 12 | 慶応大学アカペラシンガーズK.O.E            | アカペラ 生ライブ                          |